

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第43集 (2011年度) 2012年3月発行：117-134

中央学舎区

—1950年代仏越戦争期におけるベトナム高等教育の揺籃—

大 塚 豊

中央学舎区

—1950年代仏越戦争期におけるベトナム高等教育の揺籃—

大塚 豊*

はじめに

第二次大戦中の日本による短期間の占領統治を脱したベトナムでは、大戦以前に1884年から長年にわたり同国を植民地支配したフランスが再度の植民地化を目論んで侵攻し、独立宣言したベトナム民主共和国との間に戦火を交えることになった。この仏越戦争ないし抗仏独立戦争の期間中、ベトナムは戦火を避けて隣接する中国広西壮族自治区に中央学舎区 (Khu Hoc Xa Trung Uong) と呼ばれた文教地区を構築し、いくつかの教育機関を設けて、抗戦遂行とその後の国家建設のための中核となる人材の養成を行った。それらの中国国内に置かれた諸学校は、当時その事実を対外的に伏せ、中国の所有物のように見せるため、中国語の名称「広西南寧育才学校」と総称された¹⁾。そうした政治的背景も起因して、同地区・学校に関する史料は、中越双方できわめて乏しかった。ベトナムで刊行された教育史関係の書物には、関連記述がほぼ皆無である。例えば、『ベトナムの大学・中等専門学校史』に、「中国広西の農村に、両国の広範な同意の下、学舎区が設置された」²⁾ という2行の記述があるに過ぎない。わが国のベトナム教育に関する論考にも、関連の記述がほぼ見られない³⁾。

中央学舎区には、1951年10月1日の正式発足から1958年の終結までの間に、最も初期に設置された高等教育レベルの機関として基礎科学学校と高級師範学校の他、中等教育機関としての中級師範学校、初級師範学校があり、さらに、中国語学校 (教員養成コースと通訳養成コース)、初等・中等の普通教育機関や幼稚園まで置かれた⁴⁾。小論では、これらのうち、高等教育レベルの基礎科学学校と高級師範のみに絞って、文書史料の空隙を関係者に対する聞き取り調査で補うことにより、それらが如何なる状況の下で創られ、どのように運営され、さらに、そこで育まれた人材がベトナムの高等教育の形成に対して、如何なる貢献をなしたかについて、その実態に迫ることを目指した。

当時、中国は国共内戦を経てようやく新政権による建国に漕ぎ着けて間もなく、加えて朝鮮戦争という国家的危機に直面しており、自国の経営だけでも山積する難題を抱えていた。にもかかわらず、助けを求めて来たかつての冊封国ベトナムを見捨てることなく、敢えてその教育発展に対して支援を行った。厳しい条件の下で大国としての矜持を見ることができると同時に、中越交流、とくに教育・文化面での交流史は愛憎の歴史である。西暦938年にゴ・クエン (呉権) がバグダンの戦いで南漢軍を打ち破るまで、紀元前111年から約千年にわたる中国による支配の下で、ベトナムには漢風文化が広まった。やがて中国を模倣した教育制度が敷かれ、優秀なベトナム人は中国へ赴

* 広島大学教育学研究科教授

いて科挙試験を受けた。中国支配を脱した後、1884年からのフランスによる植民地支配が始まるまでの再び千年近くの間、ベトナムの各王朝は文化・教育面で中国的なものを色濃く残し、李王朝の1075年には科挙制度が導入され、1076年には文廟（孔子廟）に最高学府の国子監が設けられた。

1945年に独立を宣言したベトナムと中国との蜜月関係は、社会主義の絆で結ばれたものであった。超大国アメリカとの戦争が激しさを増していた1965年当時、ベトナム支援の一環で中国に留学したベトナム人学生3,200人は、同年に中国が受け入れた留学生総数3,312人の実に96.6%に相当する⁵⁾。その後、カンボジア支援をめぐる路線対立から中越戦争が起こり、南沙諸島の油田開発でも中越関係には軋みが生じたが、関係改善の努力により教育・文化交流は好転してきている。中央学舎区はこうした現代における中越外交・教育交流史の原点をなし、この点からも見逃せないテーマである。

1. 第二次大戦直後のベトナムの教育改革

第二次大戦の終結から間もない1945年9月2日、ベトナムは独立を宣言した。ホーチミンが「侵略、飢餓、無知」との闘いと形容した状況の下、9月5日には国民教育省内に大衆教育部が設けられ、大規模な識字運動が展開された。その結果、フランスの再侵攻が始まる1946年12月までに、200万人が非識字状態を脱していたとされる⁶⁾。独立後最初の教育改革は1950～51年に、抗仏戦争のただ中で行われたが⁷⁾、その骨格はすでに1947年4月3日～6日に開催された第二回中央幹部会議において定められていた。同会議で採択された決議は、次のような内容から構成されていた。

「教育は戦時の条件に適合させ、a) カリキュラムは現実的で、医療、農業、兵器製造、貿易、外交業務など、抵抗戦争のための有能な人材の養成を目的とすべきであり、b) 生徒は自給自足のためパートタイムで働き、c) 民衆教育を発展させ、d) 少数民族のための学校を設置する。」「教育を再編し発展させるため、各教育段階のカリキュラムを作り上げ、新しい教科書を編纂する。フランスによる支配下での詰め込み式の教育を除去し、抵抗と民主の精神に則った新しい教授法を開発する。新しい教育工作者を養成し、在職者の水準を高めるために師範学校を開設する。既存の学校での実践経験を引き出し、新たな学校建設の計画を策定する（高等教育機関の創設と海外への留学生派遣に特に注意すること）。効率的な方法で民衆教育を発展させる。新国家としての歴史教科書の編纂を支援し、ベトナム革命、フランスの侵略に対する人民の抵抗戦争の歴史を書き始める。少数民族のための学校を開設し、彼らの文字を考案する。」⁸⁾

こうした方針を踏まえて1950～51年に実施された第一次教育（学制）改革は、第一に、「民族的、大衆的、科学的」という三つ原理に基づき、第二に、11年制の「植民地学校制度の遺物」⁹⁾を単一の9年制学校制度、すなわち、第一段階（小学校）4年制、第二段階（前期中等）3年制、第三段階（後期中等）2年制に短縮することであった。幼児教育と高等教育でも抜本的な改革が行われたが、高等教育については、ハノイ総合大学をはじめ都市部にあった既存の大学がフランスの占領下にあり、抗仏戦争当初ベトナム側には解放区に移転された医科・薬科大学1校があったのみであった。

2. 解放直後の広西・南寧の情況

一方、当時の広西壮族自治区や南寧市、とくにその文教界がいかなる状況であったのかを見ると、1949年11月末、中国人民解放軍部隊は3つのルートから広西に進軍し、12月4日の南寧解放に伴い、一連の接収管理工作を展開した¹⁰⁾。学校はほぼ現状が維持されたが、国民党時代の訓導制度の廃止、反動的科目とされた「公民」「国民党々義」の廃止など初歩的改革が実施され、反動的と見なされた校長や教職員が解雇された¹¹⁾。いちおうの接収活動の展開後、1950年2月8日には広西人民政府が成立した。これに先立つ同年1月、中国はソ連などとともにベトナム民主共和国を承認している。国民党正規軍は壊滅させたものの、人民政府成立後も残党・土匪が反攻の機会を狙い、安定からはほど遠かった。また、新たな幹部の養成を目的に広西人民革命大学分校が設けられた。誕生間もない省政府や中央政府は難題を抱え、自らの体制整備で手一杯の状況であったと言える。

3. ベトナムから中国への移動

1951年5月、ベトナム中部ハティン省の農村の中学校で教えていたレ・タク・カン (Le Thac Can) 青年に、抗仏戦争や革命の遂行のために基礎科学学校で学ぶ話が持ち込まれた¹²⁾。省人民委員会が村で選んだ3人のうちの1人だった。他の2人は村の党支部職員で同年齢の者と、数歳年上で県の人民委員会で水利関係の仕事をしていた者であった。若者3人は省人民委員会が与えた学校に提出用の推薦状を持って、学校がある北部の解放区「ベトバク (Vietbac=北越) 安全区」に向かった。

故郷の村を出発し、徒歩で10日かけてタインホア省 (Thanh Hoa) に着いた。ここで基礎科学学校の主任で、レ・タク・カン青年の叔父でもあるレ・ヴァン・ティエム (Dr. Le Van Thiem) に会い、入学を許可されるとともに、別の推薦状、タインホアから基礎科学学校のあるトゥエンクアン (Tuyen Quang) への道筋を描いた地図、ごく僅かの旅費を与えられた。その後も山道を歩き、12日かけて7月に学校に着き、まず3か月のコースを履修した。この間に若干の基礎数学を学んだが、多くの時間が学校建設に費やされた。同地に家らしい家はほとんどなく、ジャングルを切り開いて校舎を造る作業が続いた。学生はこの時点で他地への移動など思いもよらず、そこに居続けるものと考えていた。しかし、環境は余りに劣悪であった。電気などなく、夜は漆黒の闇になり、ノート用の紙もなく、食事にも事欠いた。中国への移動は劣悪な環境を脱するためであった。

1951年9月、教師と学生は移動を開始し、山道を12日間歩いて中国国境に達した。国境では中国人民解放軍の兵士が彼らを迎え、トラックで運んだ。180kmの道は平坦ではなくトラックは大きく揺れ、ほぼ1日を要したが、ジャングルを徒歩で進むことに比べ、はるかに楽な旅であった。

中央学舎区のもう一つの教育機関である高級師範学校で学んだ学生も、同じくベトナム各地から南寧を目指した。その一人であるヴォ・クイ (Vo Quy) 青年¹³⁾ は高校を卒業した後、1949年からやはり中部ハティン (Ha Tinh) 省のダクトー地区の農村で教員として働いていた。彼の父親は同村の人民委員会主席であった。1951年、ダクトー地区の教育長が、北部の「大学」に進学させる候補として彼を含む4人の教員を選んだことを告げた。4人は7月末に故郷の村を出発し、約1か月かけて

徒歩で北部へ移動した。戦争中であり、昼間は仏軍機による空襲の恐れがあり、夜間のみに歩いたために長い期間を要した。彼らは、ダクトーからタインホア (Thanh Hoa) 省のトーシュエン、ニンビン (Ninh Binh) 省、ホアビン (Hoa Binh) 省を経て、やはりトゥエンクアンに着いた。

各地から集まった学生はここが最終目的地ではなく、さらに中国へ向かうことを告げられた。再び移動が始まり、徒歩で約1か月かけて国境にたどり着いた。タイグエン (Thai Nguyen) を経て国境の町ランソン (Lang Son) に向かう経路がとられ、国境で人民解放軍の出迎えを受けた。この行程も夜間のみ移動であり、一晩に約30km ずつ進んだ。暗闇の中をしばしば雨に打たれながらの移動は過酷であった。加えて、虎に襲われる危険性もあった。そのため背囊に先端の鋭くとがった竹槍を立てて備えたりもした。当時、トゥエンクアンから約4キロの村には、医学校がすでに創られていた。解放区へ移動した医科・薬科大学である。上述したとおり、基礎科学学校の学生はジャングルを切り開きながら3か月の間細々と勉学を行ったが、高級師範学校の学生は少し休んで、ほぼ直接南寧に向かった。両校の正式開設は南寧到着後であった。ちなみに、トゥエンクアンにあった医学校は中国国内へ移動せず、戦争終結まで同地に留まり、必要な医師の養成に当たった¹⁴⁾。

4. 中央学舎区的环境と生活

ホーチミンの構想は、医学校の近くに基礎科学学校など諸機関を創ることであった。しかし、トゥエンクアンの環境、生活条件は劣悪すぎて、とても学習を継続しうる状態ではなかった。さらに、ここに一時結集した人々の中には、高級幹部の6、7歳の子弟も含まれていた。そこで、ホーチミンは南寧にベトナムのための学校を創る交渉を中国側としたのである。国内に学校を開く件について、中国側で直接の指示を与えたのは劉少奇と陳雲であった。1951年5月20日に劉少奇は「陳雲同志の確認を請う。本件は丁同志¹⁵⁾ から何度も要求されたので、彼らが広西に赴いて学校を設立し、ベトナム語で教育を行い、中国が援助することをすでに承諾した。経費は中国が解決する」と書き送り、これに対して、陳雲が翌21日に「現地で検討の後に伝達してよいと言いつけた」と答えている¹⁶⁾。上記の年少幹部子弟は南寧ではなく桂林に送られ、そこで初等、中等教育を受けた。

中央学舎区全体の管理に当たる監督班 (Ban giam doc) はヴォー・トアン・ニョー (Vo Thuan Nho) を総長に、グエン・シエン (Nguyen Xien, 基礎科学学校・高級師範学校教員)、レ・ヴァン・ティエム (Le Van Thiem, 基礎科学学校主任)、グエン・ヴァン・チエン (Nguyen Van Chien 中央初級・中級師範学校校長) の4名で構成された¹⁷⁾。ヴォー・トアン・ニョーは、抗仏戦ディエンビエンフーの闘いでの英雄ヴォー・グエン・ザップ将軍の弟である。第二次大戦直後にベトナム帝国 (阮王朝) 打倒を目指した、いわゆるベトナム8月革命で積極的な働きをしたヴォー・トアン・ニョーは、総長就任がベトナム労働党書記長の指示によるものであり、学校開設の正式決定は1951年10月1日であったと記している¹⁸⁾。「ホーチミンと党の方針は、愛国的で民衆解放事業に一生をささげる意志を持った人物を対象として中国に派遣することであった¹⁹⁾」という。

ベトナムからの長旅を終えて教職員と学生がたどり着いた南寧市郊外の心圩 (現在の南寧市高新区心圩和徳村九冬坡) は小さな農村であった。この選択の理由は、ベトナム労働党からの「学生の

生活が保障され、敵機の脅威を避けうる」場所で、「食料と校舎の問題が解決でき、ベトナムから遠くなく、交通が便利な都市郊外あるいは農村で、たきぎを取るのに便利な山があり、入浴に使える水があり、野菜を植える土地があること」²⁰⁾ という要請に基づくものであった。1951年8月、ファン・バン・ドン (Pham Van Dong) 首相は学校設置候補地を探すために、グエン・ヴァン・チエン (Nguyen Van Chien) とホアン・ヴィ・ナム (Hoang Vi Nam) の2人を中国に派遣した²¹⁾。心圩に学校固有の建物はなく、既存の廟や民家、臨時にしつらえた家屋が教室や宿舎として使われた。本部にもなった廟は、清末からの村の祠であった²²⁾。学生は宿舎の二段ベッドで眠った²³⁾。

学校開設準備には多額の経費を要し、中国共産党中央華南分局はその支出について中央に照会し、中央財政経済委員会が「当初予算20億元」の支出を許可した²⁴⁾。さらに、中共広西省委員会はベトナム側の「今は食・住が緊急に必要なだが、医薬、事務用品、学習用品、寝台、衣服（スパイの目を避けるために中国服を着用）等も解決できない」との要請を受けて、経費を支出し、一律に「包幹制」²⁵⁾ に基づき待遇する可否を尋ね、中共中央はこれに同意した²⁶⁾。

心圩到着の1週間後に臨時監督委員会と呼ばれる組織が設置され、最初の会議で政治思想教育の授業を行うことが決定された。祖国を離れて中国に来た学生は望郷の念が強く、学習に集中できないことを懸念してであった。課外活動では読書が多く行われたが、それは登場人物の分析を通じて、革命思想教育を施すためであり、その他、ベトナムからの将兵との交流も思想教育に一役買った²⁷⁾。

心圩では毎日2kmほど離れた場所から水を運ぶ必要があった。教師も学生も天秤棒に水桶をつけて約20リットルずつ運ぶのが日課になっていた。3度の食事はパンや饅頭、茶碗2〜3杯の米飯、野菜スープ、漬け物、ごく少量の魚か肉であった。これは当時のベトナム国内、とくに暫時滞在したベトバクに比べて恵まれていた。ベトバクでは茶碗2〜3杯の米飯に野菜の食事であり、魚や肉はなく、フランス軍の解放区封鎖作戦のために塩さえも不足していた。中国側が提供した食べ物は、質はともかく、量的には十分であったと、当時の学生は述懐した。若干の小遣い銭も与えられた。また、中国当局は兵士と同様に学生にも煙草を配給し、夏服と冬服（青色の綿入れ）を毎年与えた。経費は中国側負担であった。学生にとっての楽しみは、休日に南寧市内まで出かけて鑑賞する映画であった。その際には、学生の集団の前後を20〜30人ずつの解放軍兵士が固めて行進した。上述したように、当時は国民党軍の残党や没落地主らによる攻撃が起こる可能性があり、それから身を守るための措置であった。また、南寧に出かける時だけでなく、ベトナム人学生・生徒は大抵隊列を組んで歩いたという²⁸⁾。その後、心圩では建物や飲み水の確保が困難になったことから、翌52年には新校舎建設が広西省党委員会から要請され、中共中央はこれを承認した。この結果、南寧市内の現広西大学所在地に新しい建物が造られ、1954年に移転した。これには190億元を要した²⁹⁾。

5. 中央学舎区での教授・学習

基礎科学学校の入学者は108人、高級師範は27人（うち3人が女子）であった。両校の指導には後述する教員7人が当たった。通常は朝8時から9時30分までに1コマ、11時30分までにもう1コマの授業が行われたが、授業時間は柔軟であった。昼食と昼休みを挟んで、午後2時から5時は自習時間で

あり、学生は実験などを行った。南寧では電気が不足しており、夜はランプの灯りで学生達は学んだ。授業は急ごしらえの教室で行われた³⁰⁾。室内とはいえ、あばら屋の教室で過ごす南寧の冬は寒かった。教室に机や椅子はなく、学生は背もたれのない腰掛けと30cm×60cmほどの木の板を各自が持って集まり、小さな腰掛けに座り、板を膝に乗せて机代わりに学習した³¹⁾。

物理的条件は劣悪であったが、教員陣の多くが留学帰国者であり、新進気鋭の専門家であった。基礎科学学校で教えられた科目は数学、物理、化学であった。授業ではフランスやアメリカの教科書が主として使われた。例えば、物理学では物理学者レヴィ (Levy) 教授のフランス語で書かれた『一般物理学』が使われ、数学ではアメリカのグランヴィル (Grandville) 教授による教科書³²⁾ やコーエン (Cohen) 教授による『微分方程式』³³⁾ が使われた。後年、関係者によって編まれた『中央育才学校の思い出』には、「基礎科学学校で使用された資料は、ほとんどが中国およびソ連のものをベトナム語に翻訳したものであった³⁴⁾」との記述がある。しかし、実際に使われたロシア語教材は唯一数学の問題集 (ドリルを意味する задача という教材で、1950および60年代にソ連の後期中等学校で使用された) のみであった。化学の授業では、教員自身が準備したベトナム語の教材が使用された。基礎科学学校の教員の多くはフランス留学経験者であり、フランスの大学で教えるなどフランス語には通曉していたが、ロシア語はできなかった。若い学生のほうが適応力があり、とくに数式が中心の数学に関しては、ロシア語のドリルでも学生は理解した。教科書は限られ、教員が持つ1冊の教科書をもとにベトナム語で教え、学生はノートに書き写す方法がとられた³⁵⁾。

高級師範学校での生物学の教科書には、教員が持っていたフランス語や英語の書物が使われた。1年後に学生たちはロシア語の教材を使って欲しいと教員に頼んだが、2人の教員はロシア語には通じていなかった。一方、学生はロシア語を学び始めていたこともあって、27人の高級師範学校の学生は教員と相談し、ソ連の教材を翻訳することになった。高級師範学校で学ぶ以前にベトナムの高校で教えていた学生たちは各教科についての基礎知識があり、ソ連の中等学校で広く使われていた教科書がベトナムでも役立つと考え、数学、物理、化学、生物の教科書を翻訳する作業を進めた。訳稿は教員に渡され、完成した教科書はヴォー・トアン・ニョー総長の指示で印刷に回され、彼らがベトナムに帰国後に高校で教える時に使われた。また、教員の一人であるレ・カ・ケはロシア語から中国語に訳された教材を使っていたという³⁶⁾。

実用的な教育も行われたが、それは教員が町で買ってきたラジオについて、その構造や原理について講じるといったものであった。講義の内容や質は、教科書が当時としては世界の最高水準のものであり、後述するように、優れた経歴の教師陣を擁していたことから、きわめて高いものであった。後に中国やソ連に留学した基礎科学学校卒業生は、ソ連や中国の同級生に数学や物理についてしばしば教えるほどのレベルになっていた。教材が多くあったわけではないが、分析能力の高さという点では、当時の中国やソ連の大学の水準を超える者が養成されていたという³⁷⁾。

ちなみに、教授学習活動自体に対する中国側からの干渉は、基礎科学および高級師範の両校に関する限り皆無であった。南寧に到着直後の1週間ほどの間に、ごく簡単な中国語の日常会話を教えられたことはあったが、本格的に中国語を学習することはなかった。たまたま中国国内に置かれたものの、両校の教育に関しては、完全にベトナム流に行われたことになる。中央学舎区には、両校

以外に初等・中等の諸学校も設置された。広西壮族自治区では桂林にも育才学校が創られ、そこでは初等・中等教育が施され、この場合には中国語が教えられ、中国人教員が関わることもあった。

6. 中央学舎区の教員群像

基礎科学学校および高級師範学校の教育は、7人の教員が担当した。基礎科学学校の主任も兼ねた数学のレ・ヴァン・ティエム、物理学のガイ・ニュー・コントム、水文気象学のグエン・シエン、数学のグエン・カン・トゥアン、物理学のドウオン・チョン・バイの5人が高級師範学校の授業も担当し、高級師範学校主任で生物学のダオ・ヴァン・ティエンと植物学のレ・カ・ケの2人は高級師範学校のみで教えた。彼らの教育歴とその後の経歴は、以下のとおりである。

レ・ヴァン・ティエム (Le Van Thiem, 1918年3月29日～1991年7月3日) :

ハティン省ドクトー区チュン・レ村の知識人家庭に生まれた。1930年からクイニョン・コレージュ (Collège de Quy Nhon) に通った。同校で自然科学、とくに数学で抜群の成績をあげ、本来9年の学習を4年で修了し、仏領インドシナ大学 (Université de l'Indochine) に進学した。当時の同大は小規模で³⁸⁾、数学科はなかったため、物理学・化学・生物学科に入った。1939年に優等で学期末試験を終えた後、フランスの高等師範学校 (École Normale Supérieure) 留学の奨学金を与えられた。勉学は大戦の勃発で一時中断されたが、1941年に再開できた。彼は通常の3年ではなく1年間で数学の学士号を取得した。1945年、ジョルジュ・ヴァリロン³⁹⁾ (Georges Valiron) 教授の指導の下で博士論文を書き上げ、学位を取得した。その後の数年間、ロルフ・ハーマン・ネバンリンナ⁴⁰⁾ (Rolf Herman Nevanlinna) との共同研究のためにチューリヒ大学に移った。

1949年、ホーチミンの呼びかけに応じて、独立戦争を支援するために祖国へ帰った。1950年代半ば、国立教育・基礎科学大学 (今日ハノイ教育大学、ハノイ国家大学) の学長に任命された。1970年にベトナム数学研究所の初代所長に就任した他、ベトナムを代表するラテン語と英語による二つの数学の専門誌の創始者および初代編集長を務めた。死後、国家への貢献を顕彰するため、「勲三等国家解放勲章」「勲二等労働勲章」「勲一等独立勲章」「ホーチミン賞」を授けられた。数学の英才のための奨学金の名称およびハノイ市内の通りにその名を残している⁴¹⁾。

ガイ・ニュー・コントム (Nguy Nhu Kontum, 1913年～1991年) :

コントム省の公務員家庭に生まれた。ハノイのブオイ (Buoi) 校で学び、1932年に高校卒業時に国語、数学、哲学の3科目のバカロレア試験で優等修了証書を獲得し、フランス留学の奨学金を与えられた。ソルボンヌ大学で物理学の学士号、物理学・化学の修士号を取得した後、フレデリック・ジョリオ＝キュリー (Frédéric Joliot-Curie) の研究所で博士号取得のための研究を行った。

第二次大戦が勃発すると、1939年にサイゴンにあった名門シャスループ・ローバ校 (リセ) で教えるためにベトナムに戻った。その後ハノイのブオイ校でも教壇に立った。知識人の愛国心を鼓舞する協会を創り、同僚と科学専門誌を創刊した。国立ハノイ大学の初代学長となり、1982年の引退までその地位にあった。引退後、ベトナム技術・科学連合の最高幹部会委員およびベトナム物理学協会会長に就任した。『ベトナム百科全書』の編集者の一人であり、現代物理学の研究書や高校・

大学の物理学教科書を数多く著し、優秀な科学者や教師を育てた。教育界以外でも、国会下院議員、ベトナム祖国戦線委員、ベトナム労働組合連合最高会議幹部会委員、教育労働者組合書記長、越仏友好協会理事など、社会活動でも活躍した。ハノイにはその名に因んだ通りがある⁴²⁾。

グエン・シエン (Nguyen Xien, 1907年7月27日～1997年) :

ゲアン省ヴィン市の儒教を重んじる家庭に生まれた。1926年には、愛国者ファン・チュー・チン追悼ストライキに参加したために放校処分にあった。友人数名と独学でバカロレア試験に合格するとともに、ツールズ大学留学の奨学金を獲得した。1932年にベトナムへ戻ったが、フエで公務に就くことなく、教師となるべくハノイに向かった。1937年に専門を水文気象学に変え、1941年にはフリーエン・キエンアン気象台長となった。この間、インドシナ半島全体での科学専門誌 Science の発行に携わった。抗仏戦争の勃発後、高等教育の基盤確立に尽力した。1955～1959年、社会支援省大臣を務めた。1956年には社会党書記長となり、1988年の同党解散まで、その職にあった。国会下院の議員であり、常務委員会議長も務めた。1960年から1976年まで気象庁長官となり、ベトナム地球委員会および国家技術科学委員会の委員長も務めた。これらの功績に対して、「ホーチミン勲章」を授与され、その名をハイフォン市の通りの名称に残している⁴³⁾。

グエン・カン・トゥアン (Nguyen Canh Toan, 1926年～) :

1942年、フエのリセで学び、1942年に数学でバカロレア試験に合格した。1946年には、一般数学試験において優等の成績を取めた。抗仏戦争期の1947年から高校数学教師の職にあったが、1951年に教育省の要請に応じて中央学舎区に赴いた。1954年からはハノイ科学大学で数学を教えた。1957年にソ連留学に派遣され、1959年にはモスクワ大学で副博士号を取得した。1958年、ハノイ教育大学で数学を教える傍ら、幾何学分野で独自の研究を行った。1963年、ソ連への3か月の出張中に博士号取得の口頭試問に合格した。これはベトナム人が国内で研究し、ソ連で基礎科学に関する学位を取得した最初の博士論文であった。その後、ハノイ教育大学の数学科主任、学長 (1967～1975年)、教育省副大臣 (1976～1989年) の職にあった。過去40年にわたりベトナム数学会の副会長を務め、『数学と青年』誌の編集長を務めた。1970年には彼の提案に基づき、自然科学の大学院課程が開設された。これらの功績に対して、「一等抵抗勲章」「勲一等労働勲章」「教育への大きな貢献に対するメダル」「人民教師」の称号などが与えられた⁴⁴⁾。

ドウオン・チョン・バイ (Duong Trong Bai, 1924年8月29日～2011年3月16日) :

主に西洋人のための学校であったアルパール・サロー校 (リセ) を卒業し、大学在学中に起こった8月革命に参加し、非識字者一掃のために働いた。フート省の高校在職中に要請に応じ中央学舎区に赴いた。1957年にソ連のデュプナ原子力研究所が受け入れた3人のベトナム人インターンの一人である。1966年に副学長としてタイグエン師範大学の創設に関わり、1971年には同大学の学長となり、とくに少数民族との融和に尽力した。南北統一後にはハノイ師範大学長に任命され、1980年には大学教員の資格認定を行う国の審議会により統一国家として最初の教授に認定された。その後、教育省で教育改革委員会の議長を務めた。こうした業績に対して、「勲一等労働章」「勲二等抵抗章」「人民の教師」「教育部門の労働英雄」など、数々の荣誉や称号を与えられている⁴⁵⁾。

レ・カ・ケ (Le Kha Ke, 1918年7月1日～2000年7月23日) :

ハティン州フォン・ソン県フー・バン村で生まれた。フランス植民地時代に農業大学を卒業し、1945年以降、北部の農業森林研究所長として勤務し、1949～1950年には、ハティン州のファン・ディン・フン高校で教えた。南寧から帰国後、1956年から1967年までハノイ大学の生物学部で植物学などを教えた。1968年以降、専門分野の植物学を離れ、ベトナム社会科学研究所へ異動し、ベトナム言語学研究所創設者の一人となった。1997年に同研究所を退任するまでの約30年にわたり、24種類の辞書を執筆・編纂した。とくに『仏越辞典』『越仏辞典』『英越辞典』が重要な業績である。植物学分野では、共編著の『仏越植物辞典』(ハノイ科学技術出版社、1978年刊)がある⁴⁶⁾。

ダオ・ヴァン・ティエン (Dao Van Tien, 1920年8月23日～1995年5月3日) :

1920年にナムディン市の儒教を重んじる家庭に生まれた。1942年、インドシナ大学の学生時代に、ボリス・ノワイエ教授の指導の下、友人と行った亀の血の研究と心臓生理学の研究が同大の科学雑誌に掲載された。1944年に同大動物学専攻を卒業した。1940年代初頭に生物学を中心に7000語以上を含む中越両言語による用語集を作成し、ノワイエ教授が序文を寄せた。1946年に抗仏戦争が勃発すると、軍医部に所属し、ベトバク地区の陸軍軍医学校で教えた。その後、1951年から中央学舎区で教えた。1954年にハノイ科学師範大学の自然科学部で教えるために中国から帰国した。その後、生命科学大学(現在はハノイ国家大学に統合)、ハノイ医科大学でも教鞭を執った。学外でも西太平洋水産総合研究センター、哺乳動物研究国際委員会名誉会長などを歴任。パリ大学(1979年)、プノンペン大学(1981年)、アンタナナリボ大学(1983年)で客員教授を務めた。環境問題に強い関心を示し、環境教育の実施、国立公園の開発と自然保護、ベトナム北西部の森林管理計画に積極的に関わった。こうした功績に対して、「人民の教師」、「ホーチミン賞」などの称号や顕彰を受けた⁴⁷⁾。

7. 基礎科学学校・高級師範学校卒業生のその後

基礎科学学校卒業生の約30%は、大学教員ないし中央各省庁の官僚となった。一方、高級師範学校の目的は後期中等教員の養成であり、実際に卒業生の多くは高校教員となったが、一部は大学教員に採用された。1956～57年に総合大学、師範大学、工科大学、農業大学、医科大学が創設されたが、これらの教員の多くは中央学舎区で訓練された人々であった⁴⁸⁾。

基礎科学学校は1954年まで授業が行われ、53年に学生は2グループに分けられた。約半数は中国、ソ連、東ドイツなど社会主義国への留学準備に取りかかり、ほどなく各国に派遣された。残りは54年まで心圩での学習を続けた後、ベトナムに帰国した⁴⁹⁾。基礎科学学校を修了後に外国へ留学した人々の例として、レ・タク・カン氏は中国の武漢大学水利学科に留学し、1957年に帰国後、ハノイ・ポリテクニク大学の水利学科主任となった。当時、同大学にはソ連の専門家が滞在しており、ベトナム人教員を支援した。レ・タク・カン氏とソ連人専門家は共通言語のフランス語で会話し、水利学など多くの科目の講義内容について論じた。同氏は1961～64年にはソ連に留学し、博士号を取得した後に再びポリテクニク大学で教鞭をとり、66年から高等教育・職業教育省の研究局長となった。

彼と同時期に武漢大学に留学した10人は、帰国後に専門に関係した工場や中央省庁、大学に配置された。1人が水利省に就職し、5人がポリテクニク大学の教員となった。彼ら留学帰国者は自らの専攻分野だけでなく、他の多くの科目の授業を担当した⁵⁰⁾。

基礎科学学校の卒業生全員のキャリアに関するまとまった資料はない。若干の人々のその後を事例的に追うことによって、同校の役割を考える手だてとしうるのみである。例えば、ハノイ大学物理学部長を務めたホアン・フォン (Hoang Phuong) 氏。基礎科学学校を修了後、武漢大学で水利学を学び、さらにソ連に留学して博士学位を取得してハノイ大学水利建設学部長を務めたヴ・ヴァン・タオ (Vu Van Tao) 氏。武漢大学で水利学を学んだ後、帰国して水利 (灌漑) 大学の学長に就任し、灌漑省の副大臣を務めたグエン・ヴァン・クン (Nguyen Van Cung) 氏。ソ連に留学し、博士号を取得して帰国した後に交通大学学長に就任し、科学・工学省副大臣になったレ・クイ・アン (Le Quy An) 氏。ハノイ工科大学建設学科主任となり、さらにソ連留学で博士学位を取得して土木工科大学の学長や計画・投資省大臣を務めたドー・クオック・サム (Do Quoc Sam) 氏。ハノイ大学に勤務し、さらにソ連留学で博士学位を取得してハノイ人民委員会副議長、建設省副大臣などを務めたファム・シ・リエム (Pham Si Liem) 氏などがある。

高級師範学校からも1954年には第一期生が、1956年には第二期生が卒業した。同校卒業生の70～80%は高校の教員となったが、中には北部の各大学 (法科大学、医科大学、文科大学、工科大学、師範大学、農業大学) の教員になる者もいた⁵¹⁾。ヴォ・クイ氏はまず故郷タインホアの高校で5か月間教えた。抗仏独立戦争勝利の1年後に国内で高等師範の創設が始まると、彼はハノイに呼ばれ、教育省に勤務してその設置準備に当たった。同校は1955年から設置準備が始まり、翌年開設に漕ぎ着けた。もともと鳥類学専門のヴォ・クイ氏は高等師範学校の創設に伴って、同校で講師として生物学を教え、後に学部長の職に就いた。当初高校の教員となった者の中からは、社会主義国に留学して博士学位を取得し、大学で教えたり、中央省庁の大臣、副大臣となったりする者が現れた。ヴォ・クイ氏も留学組であり、1964年にソ連に派遣され、1966年にモスクワ大学で博士学位を取得して帰国した。帰国後はハノイ大学生物学部に勤務し、同時に高等師範学校、農業大学、さらにゲアン省のヴィン大学でも教えた。この他、高級師範学校卒業生で後に中央省庁幹部になった者として、グエン・ディン・トゥー (Nguyen Dinh Tu) 高等教育省大臣、グエン・キー (Nguyen Ky) 教育省副大臣、グエン・チュオン・チャウ (Nguyen Chuong Chau) 教育省副大臣などを挙げうる。

おわりに

1951年に南寧郊外に設置された基礎科学学校および高級師範学校は、前者の修了生が54年、後者は第一期生が54年、第二期生が56年に卒業したのをもち、その幕を閉じた。わずかに数年間存在しただけであったが、上述したとおり綺羅星の如く人材が生まれ、その後のベトナム高等教育の発展に欠くことのできない基盤を作り上げた。その意味で、現代ベトナムの高等教育の発展を考える上で、中央学舎区が持つ意義は紛れもなく大きい。無論、南寧での学習や諸々の経験のみが、卒業生のもその後の活躍を支えたのではないことは言うまでもない。彼らの中には引き続き海外へ留学して

各専門分野に対する造詣を深めた者も少なくなく、南寧以後の研鑽が果たした役割を考慮しないわけにはいかない。しかし、中央学舎区での経験を抜きに語ることはできないであろう。中央学舎区はまた、上述した第一次学制改革の集中的な実験場でもあった。

中央学舎区の管理運営指導者の一人、グエン・ヴァン・チエンはその回顧録の中で、「中央学舎区は特殊な教育基地であった。この間、学生と幹部は集中的な寄宿生活を過ごし、国内の生活から遠く離れ、同地の住民とも距離を置いていた。それは静かな教育環境であり、教師と学生の教育および研究の効率を高めるのに有利であった」⁵²⁾と述べている。さらに彼は、中央学舎区で学んだ者がなぜ短期間に抗仏戦争やその後の建設事業での中核となり得たのかについて、三つの要因をあげている。第一に、学校が政治的側面に重点を置き、強固な教育態勢を作り上げ、多くの専門性の高い教員が雲集していたこと。第二に、学生の積極性、自発性をかき立て、とくに人材の選抜に細心の注意が払われたこと。第三に、自民族の神聖な抗戦事業が重要な原動力となったこと⁵³⁾、である。

小論でごく一端を解明したように、中央学舎区での教育は、中国側の手厚い援助に支えられ、ベトナム国内の戦火から切り離された相対的に平穏な環境で行われた。逆に、そこへ至る道程での艱難辛苦や生命の危機と隣り合わせの状況は、関係者に平穏の価値を享受せしめたであろうし、大義ある抗戦遂行や救国のために学ぶ意義を認識させるのに十分であったろう。加えて、上述したように、当時現実に望み得た最高水準の頭脳が、留学先からのものも含めて先端の知を伝えた意味は大きい。戦時など危機的状況における教育の在り方、あるいは緊迫した状態の中でのある種の精神的昂揚がもたらす、弛緩した平時以上の教育効果という観点から、きわめて興味深い事例でもある。中央学舎区の教育実践は、ベトナム高等教育史研究の中で語り継がれてしかるべきものであろう。

【注】

- 1) 「南寧育才学校旧址維修完畢 博覽会期間將對外開放」<http://news.qq.com/a/20071010/000969.htm> (2011年3月17日閲覧)
- 2) Le Van Giang (chu bien). *Lich Su Dai Hoc Va Trung Hong Chuyen Nghiep Viet Nam; Tap I Tu Cach Manag Thang Tam 1945 Den Chien Thang Bien Bien Phu 1954*, Vien Nghien Cuu Dai Hoc Va Thch, 1985, p.165. 他の代表的な著作である Cong Doan Giao Duc Viet Nam. *Cong Doan Giao Duc Viet Nam 45 nam Xay Dung va Phat Trien 1951-1996*. Nha Xuat Ban Giao Duc, 1996., Phan Minh Hac. *Vietnam's Education*, The Cloi Publications, 1998 では、中央学舎区についてまったく触れられていない。
- 3) わが国におけるベトナム教育に関する初期の論考である広木克行「ベトナム教育改革史」アジア・アフリカ研究所編『ベトナム（上巻）自然・歴史・文化』（水曜社、1978年刊）では、抗仏戦争遂行と将来の社会建設の需要に言及され、「それにもとづいてできたのが基礎科学学校であった」（同書、164頁）と述べられているが、その所在地などの記述はない。同氏の論考「民族の独立と教育の創造」（『教育』No.271, 1971年12月号, 国土社, 88～99頁）は、「抗仏戦争期（1945年～54年）の教育と教育運動」を論じたものであるが、同時期に存在した中央学舎区

- への言及はない。最近の著作である近田政博『近代ベトナム高等教育の政策史』（多賀出版、2005年刊、全418頁）には、「中国の南寧に『中央学区』(Khu học xa trung uong)を1951年に設立し、この地にいくつかの高等教育機関を設置した」として、13行が説明に割かれている（同書、141頁）。
- 4) 各教育機関の累積の在籍者数は以下のとおりである。①基礎科学学校（1951～55年の1コース開設）108人、②高級師範学校（1951～53年）27人、（1954年～56年）80人、③中級師範学校（1951年～56年に4コース開設）700人（その内訳は自然科学300人、社会科学400人）、④初級師範学校（1952年の特別コース）120人、（1953～56年に4コース開設）1,400人、⑤中国語学校（1952年～56年に師範教育3コース開設）280人、（1952年～56年に通訳教育3コース開設）373人、⑥普通教育（1951年～58年）約3,000人（そのうち2,000人はベトナム南部の生徒）。また、1951年～58年の間に、これらの児童・生徒・学生の教育に当たった幹部および教員は」150人、中国人を除く職員は約100人であった（Ban Lien Lac Khu Hoc Xa Trung Uong (ed.) *Nho Lai Va Suy Nghi Ve Khu Hoc Xa Trung Uong (1951-1958)*, Hanoi, 1991, p.34）。
 - 5) 中華人民共和国教育部計画財務司編『中国教育成就1949～1983』人民教育出版社、1984年、136頁。
 - 6) 広木克行「ベトナム教育改革史」前掲書、160頁。
 - 7) Nguyen Van Huyen (Minister of Education). “General Education in the Democratic Republic of Viet Nam.” *General Education in the D.R.V.N. (Vietnamese Studies, No. 30)* 1970, p.8.
 - 8) “From the August 1945 Revolution to the first school reform (1950-1951)” *ibid.* pp.171-172.
 - 9) 広木、前掲論文、163頁。
 - 10) 「關於南寧市軍管会一月的接管工作報告（1950年1月25日）」広西壮族自治区档案館編『广西解放』广西人民出版社、1999年12月、353頁。
 - 11) 同上書、357頁。
 - 12) 2005年3月16日、筆者がハノイでレ・タク・カン氏に対して行ったインタビューによる。以下、本節の記述は、特別の断りがない場合、同インタビューの記録による。
 - 13) 2008年12月25日、筆者がハノイでヴォ・クイ氏に対して行ったインタビュー。同氏による回想は（越南）武貴「回憶在中央学舎区高級師範學習的歲月」中国広西壮族自治区档案館・中国広西壮族自治区社会科学院編『中越友誼的歴史見証—広西南寧育才学校資料選編—』（以下、『資料選編』と略記）中国档案出版社、2010年、466～468頁にも見られる。
 - 14) 同上。
 - 15) 「丁」とはホーチミンが抗仏戦争中に中国側と連絡をとる際に用いていた暗号である。
 - 16) 「劉少奇、陳雲關於越南送兒童來桂學習的批示（1951年5月20日～21日）」前掲『資料選編』3頁。
 - 17) GS Nguyen Van Chien “Khu Hoc Xa Trung Uong,” Ban Lien Lac Khu Hoc Xa Trung Uong (ed.) *Nho Lai Va Suy Nghi Ve Khu Hoc Xa Trung Uong (1951-1958)*, Hanoi, 1991, p.21.
 - 18) Vo Thuang Nho “Nho Ve Khu Hoc Xa Trung Uong (12/1951-11/1955),” *ibid.* p.5.
 - 19) *ibid.* p.9.

- 20) 「中共広西省委關於越南二千名學生來廣西學習問題致中央，中南局併羅貴波電」(1951年5月23日) 前掲『資料選編』4頁。
- 21) ファン首相はこの仕事が両国関係に関わる重要な任務であり、「慎重，厳粛に」行うようにと注意した。中国への移動は当時労働党と中国共産党との連絡員をしていたドン・ヴァン・ジャプ (Dang Van Giap) が手配し，ホーチミンとともにフランスから帰国し，病氣治療のために中国へ向かう医師チャン・フウ・ジュエ (Tran Huu Duyet) が同行した (前掲『資料選編』388頁)。
- 22) 蒙蔭昭編『広西教育史誌』(第十編 其它教育) 1992年第4期，86頁。
- 23) (越南) 黄玉鐘「学舎区的初期」前掲『資料選編』450頁。
- 24) 「中共中央華南分局關於越南労働党中央送兒童來桂學習問題致中央電」および「中央人民政府政務院財政經濟委員會關於越南在廣西辦兒童學校經費問題致華南分局電」前掲『資料選編』4頁および5頁。1953年のデノミネーションにより1万元=1元と決まる前の20億元である。
- 25) 革命戦争の時期および解放初期に実行された幹部の生活待遇に関する制度の一種であり，各人が毎月一定の標準的な食事を供給される他に，若干の実物あるいは貨幣が交付される仕組みを指す。ちなみに，集団での食事の基準として設けられていた「大竈」「中竈」「小竈」のうち，学生に対しては最下級の「大竈」の基準が，幹部に対しては「中竈」の基準が適用された (阮文展「中央学舎区」前掲『広西南寧育才学校資料選編』389頁)。
- 26) 「中共広西省委提議撥一筆開辦費給越方学校致中央電」(1951年6月2日) および「中共中央關於同意撥越方学校一筆開支的批復致広西省委電」(1951年6月11日) 前掲『資料選編』5頁。
- 27) Ban Lien Lac Khu Hoc Xa Trung Uong (ed.) op. cit. pp.6~8.
- 28) 前掲，ヴォ・クイ氏インタビューによる。
- 29) 「中共広西省委關於越南育才学校遷校修建予算的報告」(1952年10月17日) および「中共中央關於同意拨付越南育才学校款190億元的批復」(1951年10月25日) 前掲『資料選編』231頁。
- 30) 教室は学生自身が竹で編んだ骨組みに茅で屋根をふいて作ったと，学生の一人は回顧している (黄玉鐘，前掲論文)。
- 31) 前掲，レ・タク・カン氏インタビューによる。
- 32) ウィリアム・アンソニー・グランヴィル (William Anthony Granville) は1895年から15年間，イエール大学数学教授として教え，1897年には同大から博士号を授与されており，アメリカで広く使われた『微積分の諸要素 (Elements of the Differential and Integral Calculus)』をはじめとする数学教科書数冊を出版した。南寧では，これらのうちのいずれかが使われたものと思われる。
- 33) Abraham Cohen, *An Elementary Treatise on Different Equations*, University of Michigan Library, 1906と思われる。
- 34) Ban Lien Lac Khu Hoc Xa Trung Uong (ed.) op. cit. p.16.
- 35) 前掲，レ・タク・カン氏インタビューによる。
- 36) 前掲，ヴォ・クイ氏インタビューによる。
- 37) 前掲，レ・タク・カン氏インタビューによる。同氏はソ連，中国への留学経験から比較が可能。

- 38) インドシナ大学は宗主国フランスと植民地当局の政策の変化に伴って、閉鎖、再開、拡張、停滞と変遷し、1930年代半ばには医薬学校と政法学校のみ構成になった（近田政博『近代ベトナム高等教育の政策史』多賀出版、2005年、75～88頁）。
- 39) ジョルジュ・ジーン・マリー・ヴァリオン（1884年9月7日～1955年3月）は複素解析における貢献で著名なフランス人数学者であり、ストラスブール大学、パリ大学で教鞭を執った。
- 40) ロルフ・ハーマン・ネバンリンナ（1895年10月22日～1980年5月28日）は関数論（複素解析）で有名なフィンランドの数学者である。専門の数学の他、文化や政治に関心を示した。
- 41) http://wapedia.mobi/en/Le_Van_Thiem（2011年3月17日閲覧）とレ・タク・カン、ヴォ・クイ両氏からの聞き取りによる。
- 42) http://vi.wikipedia.org/wiki/Ng%E1%BB%A5y_Nh%C6%B0_Kontum（2011年3月17日閲覧）とレ・タク・カン、ヴォ・クイ両氏からの聞き取りによる。
- 43) http://vi.wikipedia.org/wiki/Nguy%E1%BB%85n_Xi%E1%BB%83n（2011年3月17日閲覧）とレ・タク・カン、ヴォ・クイ両氏からの聞き取りによる。
- 44) http://vi.wikipedia.org/wiki/Nguy%E1%BB%85n_C%E1%BA%A3nh_To%C3%A0n（2011年3月17日閲覧）とレ・タク・カン、ヴォ・クイ両氏からの聞き取りによる。
- 45) <http://dantri.com.vn/c25/s25-466221/nha-giao-nhan-dan-gs-duong-trong-bai-day-chu-la-day-nguoi.htm>（2011年3月17日閲覧）とレ・タク・カン、ヴォ・クイ両氏からの聞き取りによる。
- 46) レ・カ・ケ教授とファン・ディン・フン高校で一緒に教えたことがあり、南寧では教え子となり、帰国後にはハノイ大学生物学部で同僚となったヴォ・クイ氏から提供された情報、および http://vi.wikipedia.org/wiki/L%C3%AA_Kh%E1%BA%A3_K%E1%BA%BF（2011年3月17日閲覧）による。
- 47) <http://www.sinhhocvietnam.com/vn/modules.php?name=News&file=article&sid=350>（2011年3月17日閲覧）とレ・タク・カン、ヴォ・クイ両氏からの聞き取りによる。
- 48) GS Nguyen Van Chien, op.cit. p.14.
- 49) 前掲、レ・タク・カン氏インタビューによる。
- 50) 同上。
- 51) Ban Lien Lac Khu Hoc Xa Trung Uong (ed.) op. cit. p.15.
- 52) 阮文展, 前掲論文, 390頁。
- 53) 同上, 391頁

The Central School Area: A cradle of Vietnamese higher education during the French-Vietnamese War of the 1950s

Yutaka OTSUKA *

During the anti-French war for independence that followed World War II, Vietnam avoided the hostilities by establishing the so-called “Central School Area” (Khu Hoc Xa Trung Uong) in the neighboring Chinese Guangxi Province, where it carried out staff training for the war of independence and nation-building during the postwar period. These Vietnamese schools established in China were generally called “Yucai Schools”. Meanwhile China, in spite of the national crisis posed by the Korean War, which immediately followed the establishment of the new People’s Republic, demonstrated its national pride by providing support for Vietnam.

This paper examines the history of joint school management by China and Vietnam that evolved during the first half of the 1950s, and which has only rarely been described in the educational history literature on Vietnam. The paper tries to explore the actual situation faced by schools in the area, and describe how the schools contributed to the development of Vietnamese higher education, by using information obtained from the relevant historical documents of both countries, as well as from interviews conducted with those involved.

The Central School Area, from its formal inauguration on October 1, 1951 until its closure in 1958, comprised a basic science school and a higher normal school - higher education institutions, that were established in the earliest stages; secondary educational institutions consisting of a middle level normal school and a lower level normal school; a Chinese language school (providing both teacher training and interpreter training courses); and general primary and secondary schools, plus a kindergarten. This paper focuses on the higher education institutions, including the basic science school and the higher normal school: it describes how these schools were established, how they were managed under various circumstances, and how the people educated and trained in the schools contributed to the formation and development of higher education in Vietnam.

Although the schools existed for only a few years, many talented people, like glittering stars, emerged from them to form an indispensable base for the subsequent development of Vietnamese higher education. Of course, it must be emphasized that it was not only their studies and various experiences at the Central School Area in Nanning, Guangxi Province that were responsible for the alumni’s subsequent success. Some frequently went abroad to study and expand their knowledge of their respective disciplines. Therefore the role of their post-Nanning experiences must also be considered. Nevertheless, the Central School Area certainly played an important role and also served as an intensive experimental site for the first reforms of the Vietnamese educational system.

* Professor, Graduate School of Education, Hiroshima University

One of the four leaders of school governance in the Central School Area, Nguyen Van Chien, explained why those who studied in the area were able to become leading figures during the anti-French war era and also able to help the nation reconstruct within such a short period of time during the subsequent peace. He pointed to three factors: firstly, the schools emphasized political and patriotic issues, which provided a firm educational base, plus there were many highly specialized teachers; secondly, careful attention was paid to the selection of talented people and students' positive attitudes and self-reliance were fostered; and thirdly, the notion of a sacred resistance to the French was an important driving force.

Educational practices employed in the Central School Area deserve to be carefully explored, and the information handed down from generation to generation, in the historical study of higher education in Vietnam. Moreover, it seems that the practices employed in the Central School Area provided interesting examples as to how education should be conducted during periods of war or during other critical times.